

新書 「人類革命」

はじめに

精子と卵子の結合により、人間である知的要素が生成される。この子種にDNAの遺伝情報が依存され、時間と共に成長し、精神的にも進歩の旅を始める。母体より表出された乳児は、この世に唯一無二の存在として誕生して、無限の体験と葛藤の狭間で自らと言う「自分」を創り出す。

人は、何故に生まれ……何故に生き……何処へゆこうとしているのか……そして到達するその位置は……

哲学的問いが、人生にはつきまとう。幼い頃に見た夜空は、神秘に満ち、夢とロマンに満ちていた。「あの煌めく星には、何があるのか？何故、煌めいているのか？いつかゆけるのか？」こんな想像力が、人生そのものを目指へと導いていたのだらうと思う。それが今は、人工衛星を含めて宇宙に進出し出している。夢が現実になった瞬間である。次なる夢は、何であろうか？今の子供達に、本当に夢は、ロマンは在るのかと、問いたくなる。

宗教は人間の心の在り方を説き、哲学は人生の在り方を説き、科学は物の道理と自然の道理を説き、経済学は社会の発展と生活の豊かさを説き、医学は病理学を中心に症状改善に力を注ぎ込んでいる。心理学は、過去の経験を中心に古典力学的解釈で心を分析している。科学的技術革新は飛躍的進歩を遂げたが、心理的技術革新、精神的技術革新は、遅延していると思えない。

その根拠は「犯罪の低年齢化」「精神的トラブルの増加」「若年層の礼節の欠如」「生き甲斐の創造の混迷」挙げればきりが無い状態である。「温故知新」ならぬ「温故創新」が必要ではないだろうか。

あなたは何故生きるのか？何ゆえに生まれたのか？確信在る生き方は？と質問されて何と答えるだろうか。

今こそ、本質的な生命尊厳学が必要とされる時代が到来したと和多志は感じている。

この書を残すにあたり、大きな「きっかけ」となったのは、和多志が四七才の五月のゴールデンウィークに、父親の墓参りに行った事である。その日は、とても穏やかな空が全身を包んでいた。墓石を磨きながらふと声が聞こえた様な気がしたのである。

「本当の事、真実を、真理を、書き示せ」和多志には、そう聞こえた……。

それは、和多志の自己の声に他ならないことは十分分かつているが、和多志には「聞こえた」のである。自分に正直に生きる事が父親のテーマであった事もあり、和多志の研究を一人でも多くの人に読んで、書き写して、声に出して感じて欲しくて書き出した。人類的発想に立ち、千年先の子供達に残せるものは、これをテーマにありのままを書き綴りたい一心で、ペンを走らせた。人間の有する意識の量子解釈を中心にそれをどう活かすか、無意識に秘められた真実の法則と目的を探求しこれからの生きる指針になれば、幸いである。

目次

はじめに 3

第一章 共鳴同化 9

共鳴同化 10

心と気持ち 15

第二章 心の実態 19

心の実態 20

信頼とは 28

安らぎとは 32

無自覚領域のレベル的段階 41

潜在意識と宇宙の絶対法則 44

第三章 科学の誤り 49

科学の誤り 50

宇宙の成り立ち 53

時間の概念 56

重力について 58

素粒子論から見た脳の活動 60

第四章 脳へのアウエアネス 63

脳へのアウエアネス 64

間脳の仕組みと働き 67

人間の物質的最小構成単位である細胞 80

第五章 量子設計 DNA 83

量子設計 DNA 84

DNAの活性化 87

「守る意識」と「育てる意識」 93

ライフ・リーディング 95

相対と双極 106

第六章 生命の導き 111

生命の導き	112
経済的免疫システム	117
きっかけと気付き	119
無意識をレベルアップする為の具体的な方法	122
同化の原理	126
粒子と波	127
無限宇宙	130
波束の収縮	134
赤方偏移	137
重力の正体	140
宇宙全体	142
シンクロニシティ	145
おわりに	148

第一章 共鳴同化

共鳴同化

Center one's efforts upon one's everyday learning

～生活の中心に学習を置く事～

個人に於ける意識の持ち方は、本質的な固有波データに基準が置かれている。

その基準値は感受性、知性、論理性の複合値である。このデータはフリーエ変換された時間のタタミ込みである為、その影響は固有波データの強度分布に比例される。

だが、空間中の全データは、プランク長レベルのエネルギーと目的を持つ**意思的周波数の共鳴**である。意思的周波数には、生命を創出させ、又生命を生存させ続ける周波数が存在する。

「アルタードステーツ・オブ・コンシャスネス」変性意識に他ならない。

$7 \cdot 8 \text{ Hz} \sim 10 \cdot 8 \text{ Hz}$ 領域に全体から個、又個から全体に還元する作用量子が存在する事が明らかにされて来た。

宇宙全体を構成する極小のエネルギーである「創造の意思」は、何らかの計画と実行により、外形を持つ生命体に同化し、進化的高密度へ向かい、完全化を意思とする。所謂、計画と実行の完全化の自由化を本質的エネルギーとした。

当然の事ながら、進化の過程には成長の因子として、情報の体験における包括的経験の解釈が一つの基準となるが、その基準値が普遍的価値である事が、絶対条件となる。

人間という生命体は、模範になるモデルが必要となる。一つのモデルを学習する事で脳の中枢にインパルスが